大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

女性とスポーツと文化を論ずる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊安, 貴美江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004989

■ 女性とスポーツと文化を論ずる

Susan Birrell & Cheryl L. Cole (eds.), *Women, Sport, and Culture*, Champaign, IL: Human Kinetics, 1994 (ISBN 0-87322-650-X) p. 408.

本書は、ジェンダーとスポーツに関する理論をより深く研究したい人のために編まれた、全部で24の章から成り立つ研究論文集である。内容は5部構成になっており、第Ⅰ部「女性とスポーツとイデオロギー」は、ジェンダーとスポーツと文化、そして権力との間で、複雑に絡み合う関係と、さまざまな政治的駆け引き、及びその争点について検討した論集である。第Ⅱ部「ジェンダーとスポーツ組織」は、スポーツ研究に携わるフェミニストによる論集で、スポーツ教育や大学の競技界、スポーツコーチという職業における女性の地位や、スポーツの応援者（チアリーダー）という立場を、ジェンダーの視点から組織的、構造的に分析している。第Ⅲ部「スポーツという男性領分における女性」は、現在、男性領域として存在しているスポーツを、無批判に再生産したり、あるいはそれを崩壊させることによって生ずる緊張状態（力のバランス）について検証したもので、フェミニストによるスポーツ変革の可能性などが探られている。第Ⅳ部「メディアとスポーツとジェンダー」は、スポーツにおいて見られる女性の身体、スポーツを通してあるいはそれによって形成された女性の身体を、メディアがいかに言葉にし、描写しているかを、ジェンダーの視点で批判的に論じたもの。いまやほかのどんな手段よりもスポーツを身近なものに感じさせているメディアは、一見罪のないものとしてスポーツを描いているかのように見える。しかしながら、実はある枠組みの中でスポーツを再構成していくことによって、ある種の特権集団を利するようなイメージを生み出しているのである。メディアスポーツは、ジェンダー化され、人種化され、階級化された社会関係を再生産しているという視点で警告を発する論集。第Ⅴ部「スポーツとセクシュアリティの政治」は、身体と自己認識とジェンダーの意味合いにとって中心的なものでありながら、これまでのスポーツ研究において看過されてきた、セクシュアリティとスポーツの関係に焦点を当てたもの。ここに納められた論集は、異性愛主義と同性愛嫌悪、及

びそれらとスポーツとの関係に対しての理解を働きかけてくる。それぞれの論が異なる方法で、スポーツがいかにセクシュアリティを構築し、それを管理下に置いてきたか、そしてまた異性愛主義を再生産したりそれと闘ってきたか、などを問題にしている。

以下に、異なるパートから論文3点を揚げて、概略を述べることとする。

第Ⅱ部第10章「ポストモダンのパラドックス？　女性のスポーツ大会におけるチアリーダー」は、男性競技者を「女らしく」応援し、男性観客にとってのセックスシンボルとしてのジェンダーメッセージを持つチアリーダーが、女性解放の象徴ともいえる女性競技者の大会において応援するという「逆説的矛盾」を、リオタールのポストモダン理論に依拠しつつ、検証した論文。ローレル・デイビスによれば、そもそもスポーツのチアリーディングは男性領分に属するもので、1800年代後半に女性のチアリーダーが出現した頃は、男性領域を侵す存在として、男性から抵抗を受けた。それが1940年代から50年代にかけて女性の領域となり、逆転、そして70年代までに、チアリーディングは「自然」な女性の活動とみなされるに至った。筆者はこのようにチアリーディングの歴史をひもとくことで、現在支配的なイデオロギー的習慣が、いかに「自然化」され史実に基づかないものになっているかを示している。その上で、現在の合衆国の文化における競技者とチアリーダーにまつわるジェンダー的矛盾に触れ、そのような自己矛盾に居心地悪さを感じないというリベラリズムの受け入れこそが、ポストモダンの象徴的な一例であるとしている。しかしそうした自己矛盾の受け入れは、歴史的に形成されたジェンダーの意味合いを「自然」なものとして神話化し、忘れ去り、歪めるような状況を作り上げていると筆者は述べ、このような社会変遷には批判的に参加しなければならないと警告している。

第Ⅲ部第12章「男性領域としてのスポーツに対する、フェミニストのもう一つの選択肢に向けて」においてナンシー・セバージは、スポーツは女性の身体性とセクシュアリティを対象化し支配することによって、女性の抑圧に貢献する（単にスポーツがジェンダー的不平等を定義しているというだけでなく、スポーツを越えた社会の仕組みにおいて、その不平等の維

持に貢献する)、重要な社会的実践の一つであると論じている。男女の生物学的相違を、社会的区別と男性優位に再解釈してしまうスポーツのイデオロギーを問題視しつつ、その上でなお、スポーツの持つ「身体性」に着目して、ジェンダー支配を乗り越える方策をスポーツに見いだそうとしている。つまり、女性が自分の身体を、丈夫でパワフルなものとして経験する能力を養うことで、男性支配を覆す潜在的余地を、スポーツにつくり出せると論じている。

第Ⅴ部第21章「鎮圧と競争と制限：女子体育における同性愛嫌いの出現」スーザン・カーンによれば、1920年代には解放された「ニュー・ウーマン」の肯定的シンボルであった女性競技者は、20世紀半ばまでには、「男っぽい競技者＝レズビアン」という暗黙のメッセージとしてイメージされるようになった。スポーツと男らしさとの文化的結合が、女性の競技的成就をレズビアン・ステレオタイプの出現に仕立て上げてしまったせいであるが、このような同性愛嫌悪による批判に対応するために、女性体育教師は、彼女ら（女性の体育専攻生も含め）が異性愛者であることの証をたてねばならないという重圧にさらされた。そして、スポーツにおける競争的要素の緩和、美しさと容姿の強調、男性との仲間づきあいを期待するような資質の養成といったやり方で、女性の体育教育のプログラムを積極的に異性愛化するように制度化していったのだと、カーンは論じている。

（熊安貴美江）